月刊 社会教育
生涯学習の時代をひらく
1994 3 CONTENTS NO. 456
表紙デザイン・写真提供／マサデザイン　カット／文月もよこ

【特集】その可能性

現代の博物館

かがり火／現代の博物館に思う［小泉弓子］ 5
いま博物館は［森田恒之］ 7
日本の平和博物館の動向とその役割［岩垂 弘］ 16
【実践報告】
美術館と市民を結ぶ「関係」を求めて［降旗千賀子］ 23
子ども動物自然公園の教育活動［日橋一昭］ 31
町おこしと博物館のはたす役割［海江田義弘］ 38
【ルポ】絢爛豪華な江戸東京博物館を行く［大坪庄吾］ 47
生活詩の風景⑥［津布久晃司］ 58
世界の女たち［横田啓子］ 60
映画／「文革」を描いた中国映画を見るために［山田和夫］ 68
本／「市民のなかの博物館」［幅大］
「子ども博物館から広がる世界」［東 寿隆］ 70
公民館はみんなのもの［公民館を考える市民の会］ 73
「老い」の実態から教育や文化の課題を考える［重田統子］ 80
資料／環境基本法（抄） 88
集会報告／第16回「大都市の社会教育」研究と交流のつどい 92
シリーズ私の実践／学習を実践の力に④［加藤良治］ 94
読む会・語る会 57
社全協だより 98
編集コーナー 100

〈アメリカの多文化教育〉

世界の女たち

――アメリカのある地域における多文化活動――

横田啓子

「アマーストにようこそいらっしゃいました。外国にくると、自分の国と違っていること、頭が混乱するようなことがたくさんあることでしょう。『世界の女たち』というプログラムは、あなたと同じように疑問を持ち、助けを必要としているかもしれない、世界のいろいろな国から来た女性と出会い、アメリカ人の女性と知り合うお手伝いをします。私たちは、この国での生活や習慣の紹介をします。そして、ここで、あなたは世界中から来た人たちと友達になり、あなたの国の文化を分かち合うことができるでしょう」（「世界の女たち」の案内パンフレットより）

最近、地方自治体や民間のボランティア団体は、いろいろな国際交流の活動に取り組んでいる。これらの活動の特徴は、ほとんどが実質的に女性の好意あふれる奉仕に支えられていること、そして、「交流」というよりどちらかというと、日本人が一方的に「お客さまを歓迎しお世話する」というような形が多い、ということだろう。これらの活動は外国から来る人に日本に対する好感を与え、感謝されてきたと思う。

しかし、これからは、外国人を助けることに加えて、日本人と外国人が相互に与え、わかちあいながら、地域全体の文化的な生活も豊かになっていくような、人権意識に裏打ちされた多文化的な視点をもつ活動が求められてくるのではないだろうか。

アメリカのある地域レベルでの女性グループの多文化的な活動、「世界の女たち」を、日本の草の根レベルの活動への一助になることを祈って、紹介したいと思う。

一、「世界の女たち Round the World Women」のはじまり

アマースト町は、アメリカ東海岸のマサチューセッツ州西部にある、人口約四万人の緑の深い大学町である。州立のマサチューセッツ大学、私立のアマースト大学、ハンプシャー大学があり、この隣町にも女子大学の名門スミス大学とマウントホリヨーク大学があるため、世界各国から留学生や研究者が集まってくる。マサチューセッツ大学の前身は農業学校で、日本で有名なウイリアム＝クラーク博士はここの校長であった。後に日銀総裁になった三島弥太郎をはじめ、明治の近代化のために、ここに留学した日本人は多い。

また、クラーク博士の母校でもあるアマースト大学にも、一九世紀以来、新島襄や内村鑑三など多くの著名な日本人が学んでいる。このようにアマースト町は日本と歴史的に結び付きが深く、現在も姉妹校関係を通じて日本から訪れる研究者も多い。

実は、この「世界の女たち」というプログラムは、二五年以上も前に、日本から、研究者の夫についてアマーストにやって来たある日本人女性が、孤独と焦燥のあまりに命を絶ってしまうという、痛ましい事件がきっかけとなって作られた。創設者のゲージさんとシングルトンさんは、この事件を知って、このような犠牲を二度と繰り返さないために外国に来て孤独な生活を強いられている妻のためのプログラムを作ろうと思い立った。二人とも、外国旅行が好きで外国に行く度に、その土地の人々から親切にしてもらい、いつかその恩返しをしたいと思っていたところだった。

外国に来て生活するのは興奮に満ちた楽しいことである反面、食べ物から習慣にいたるまでいろいろな違いや変化に当惑したり、なんでもスムーズにいかず欲求不満をおこしたり、と苦労も多い。自分の意思で意欲に燃えて来る時には、こういった難題も「自己成長への挑戦」として積極的に乗り越えていける。しかし、家族の都合で自ら選択して来るわけではない時、しかも言葉もできず、子どもまで連れて来なければならない時には、不安や不満に圧倒されてしまう。言葉が不自由なために孤立し、大人として機能できずに自信喪失し、ホームシックにかかり、欲求不満になって自己嫌悪や怒りのうずまく惨めな体験になることが往々にしてある。

「世界の女たち」のプログラムは、そんな女性たちを対象に、二人の民間女性のボランティア活動から始まった。今ではアマースト町の民間団体である国際学生委員会に属して、その活動が維持されている。当地にある諸大学の国際学生部とも

緊密な情報交換が行なわれ、広報と事務諸経費はマサチューセッツ大学（州政府）から援助されている。

二、プログラムの内容

プログラムの基本は、夫が研究や仕事に従事している間、家の中で孤立しがちな妻を外に連れ出して、アマーストでの生活の仕方やアメリカの文化を紹介しながら、同地の生活への適応を助け、友達作りを手伝うことである。

毎年、四〇人くらいの参加者があり、アメリカ人ボランティアは約一五人で、そのうちの九人が運転手のボランティアである。アメリカではちょっとした日常の買い物にも友達に会いに行くのにも何をするにしても車がないと身動きできない。中国などの車使用の少ない国や、イスラム圏など女性の運転が禁じられている国から来る女性は文字どおり家に閉じ込められてしまう。だから、これらの女性を助けるためには、文化によっては夫以外の男性と同乗できないので、女性の運転手ボランティアが最も重要になる。

参加者四人に対して一人の運転手が決められ、固定した小グループを作り、安定した人間関係が育てられていく。これは、些細なことのように思えるが、どこの社会組織にも属さない女性にとって、計りしれない精神的な安定をもたらすという効果がある。

外国に住めば、その国の言葉をすぐ覚え、友達ができるというのは、甘い期待だといってよい。まず、第二言語はある程度の文法的基礎がすでに理解されていないと、ごく簡単な単文レベル以上の上達は難しい。また、現地の人と知り合うためには、家の中だけにとどまっていては不可能で、地域で何らかの活動を一緒にする機会がないと、友達というのはできにくいものである。まして言葉ができない場合はなおさらである。「世界の女たち」のボランティアのアメリカ人が「友達になろう」と手を差し伸べるのも、こういった事情を踏まえてのことである。

三、九月から一二月：アメリカ生活の紹介

九月の新学期の始まりから一二月の冬休みまでは「アメリカ生活の紹介」のプログラムが組まれている。会合は毎週火曜日と木曜日の一〇時から一二時までの午前中の二時間。どんな女性でも気軽に参加できるように会費は無料である。まず町の紹介から始まる。言葉が理解できない参加者が多いので、すべてできるだけ具体的に、実践的に紹介する。

生活の自立を助ける

日常生活の買い物のためのお店への案内に始まり、図書館の登録と利用の仕方、また病気になった時の診療の予約方法、

集まった「世界の女たち」

薬の買い方、運転免許の取り方など、生活情報を提供する。

ミシンなどの生活用品の貸し出し、帰国者が売りたい中古品の情報交換などを行なうボランティアもいる。合鍵一つ作るのに何時間もさまよい歩くというようなことも経験するのが外国生活の日常というものである。当地の習慣とシステムに慣れない外国人が、できるだけ早く自立して、合理的で快適な生活ができるようにボランティアたちは手助けする。

ある日本人女性は、アメリカに初めて来て、「右も左もわからず途方にくれていた時に、声をかけてもらい、町の様子やいろいろなことを教えてもらったことは、まるで闇の中に光が射したようでした」と、感謝をこめて述懐する。

教育相談のボランティア

学校見学にも行く。授業参観の後、食堂で子どもたちの給食も試食してもらう。アメリカの学習方法や教育システム、学校行事やＰＴＡ活動への参加の仕方、教師との連絡の取り方などについての説明も行なう。子どもの教育で困った時には、元教師であったボランティアが何でも気軽に相談にのってくれる。

例えば、言語が不自由な場合、子どもの学校そのものへの適応が難しい。暗記型の学習に慣れた子ども、教師にたくさん質問をして自主的に学んでいくという、アメリカ的な学習方法にとまどうこともある。教師も子ども、お互いに異文化

による態度の違いから誤解しあって（例えば、アジアから来た子どもは、教師の目をあまり見ず黙っていることが多いために、良い印象を与えないなど）、問題が起こることもある。こういった時に、ボランティアは必要とあれば一緒に教師に会いに行って、問題を解決するために助けてあげる。

英語講習のボランティア

外国生活をどれだけ楽しめるかは、言葉の習得が大きな決め手だ。いろいろな人と友達になりたくても、言語能力があいさつの域をでないのでなかなか人間関係が深まらずにいる人もいれば、「世界の女たち」の集まりで知り合った人と、家族ぐるみでおつあいができるほどの人もいる。

だから、「世界の女たち」の企画は、英語講習にも力を入れている。参加者には、辞書には載っていないような、この地域特有の生活用語や日常の口語表現、例えば、「タッグセール＝一般の人が家の前で中古品の販売をすること」や「ポトラックパーティ＝それぞれがお料理を持ち寄って開く懇談会」などの、簡単な説明が載っているパンフレットが渡され、具体的な説明が行なわれる。

それに加えて、希望者には無料の英語講習も用意されている。この英語講習は、「世界の女たち」が属しているアマースト国際学生委員会が、外国人へのプログラムとして行なっているもので、この委員会のメンバーがボランティアの募集と紹介に協力してくれている。個人宅を訪問して教える場合が多いので、信頼できるボランティアを集めるために、口込みによる募集方法をとっている。

英語講習は、一対一か、四、五人のグループで行なわれる。大人数では行なわれない。ボランティアに対して、九月のはじめに研修会が開かれ、異文化圏から来た人に接する時の心構えと、英語を第二外国語として教えるための基礎的な授業法を、買い物など日常生活で必要な単語や会話の練習方法を中心に教える。一度の研修では充分ではないが、ボランティアの人たちにあまり多くの時間を取らせることはできないので、研修のかわりに教授法についての文献や最低限の教材を、州立大学（州政府）の補助を受けて、無料で配布している。それに加えて、半年に二度ほどボランティアの人たちが集まって、教え方などお互いに情報を交換したり、相談しあったりする会合がもたれている。

英語講習の責任者で講師でもあるスイフトさんは、もう二〇年も、このボランティアをしている。こんなに長く続いている理由は、「何といっても多くの人と知り合えて、報いられることが多いから」だそうだ。「英語を一対一で教えることで、一人の人とじっくり知り合え友達になれますし、その人の国の文化もよく学べます。それに人の成長を助けられるということが嬉しいのです。今でもずっと文通している人が何人かいて本当に楽しんでいます」。

この英語講習には難点もある。それは、質のいい語学ボランティアをたくさん確保することが難しいことだ。ただし、ここで注意しなくてはいけないことは、語学教育は、その言葉を話せるからといって、教えられるわけではない、専門性の高いものであるということである。だから、無報酬で教えるボランティアにその専門性を望むのは、見当違いというものであろう。ボランティアだから程度の低いレッスンでもいい、という意味ではなくて、専門職の人に対しては、それなりの報酬が支払われるべきであるからである。

「世界の女たち」では、英語講習のプログラムが非常に大切なことは認識されているのだが、あくまでこのグループの趣旨に沿った、ボランティア活動でできる範囲のことを提供することにしており、それ以上のことを求める人は、大学の生涯教育コースにある英語の授業などの、専門的な機関を紹介している。

文化的な催しもの

文化的な楽しみのために、大学や美術館の見学も企画されている。コンサートに招待して一緒に行くこともある。アメリカ史やアメリカ文化の勉強会を開く。アマーストは、詩人のエミリー＝ディケンソンの生家があり、ロバート＝フロストも住んだという、文化人が多い町なので話題には事欠かない。毎年五月には、ボストンまでアメリカ独立戦争時の史跡を尋ねるバスツアーが、現地にある日本企業からの寄付を受けて行なわれている。

他に、自宅を開放してお茶会を開き、アメリカ流の社交の習慣や感謝祭などの文化行事の紹介をする人もいれば、家の飾りを作る講習会を担当する人もいる。ボランティアはさまざまな活動を分担しており、自分が楽しくできることを無理しない範囲で担当している。

よいボランティアになるために

「世界の女たち」に参加する人たちは、それぞれ異なる宗教、習慣、文化的な背景を持っている。ことに宗教規律や信仰からくる習慣の違いをよく理解しておかないと、相手の人格を深く傷つけることになったり、人間関係が壊われてしまったりすることもあるので、さまざまな文化についての知識と異文化を尊重する態度が、ボランティアの基本姿勢として求められている。だからボランティアたちは、努めて外国について本を読んだり、情報交換したり勉強をしている。

四、一月から五月：多文化プログラム

冬休みの後から六月までの半年は、参加者の女性たちが、それぞれ自分の国の文化紹介をしてお互いに学びあう「多文化プログラム」が組まれている。この催し物には町の人も参

加できる。サリーの着付けとインド料理の講習会、雛祭りと茶道のお点前、中華料理の夕べ、音楽とフォークダンスの夕べもある。毎週、準備する人たちも見る人もみんなわくわく楽しみにしている。ブラジル人の女性は、着物を着せてもらったことが嬉しく、何枚も写真を撮って国の両親や友達に送ったという。この人はこのことがきっかけで「世界の女たち」の日本人参加者から日本語を習い始めたくらい日本びいきになってしまった。

年の最後には、外国人女性もボランティアも全員、家族同伴で盛大なパーティをする。各自、自慢のお料理を持ち寄り、民族衣装も華やかな楽しい集いである。

みんなが持っている宝物をわかちあう

これらの「多文化プログラム」の催しを重ねることに、アメリカ人ボランティアも外国人女性もそれぞれが、名実ともに「世界の女たち」の一人だという連帯感で結ばれるようになっていく。

外国にいると、これまで自分を空気のように包んでいた言葉も文化もなくなってしまう。言葉が不自由だと一層孤立感が深まり、それに伴う自信喪失と不安感は、精神の健康を加速度的にむしばんでいく。最悪の時には、命をも取り上げてしまう。

だから、「世界の女たち」の集まりで仲間ができること、外国人であることがマイナスではなくなってしまうことが、とても大切なのである。ここでは、自分も他人に貢献できる貴重な宝物をもったかけがえのない人間であると確認でき、自信が育てられる。そして、他の人も自分とは違う宝物を持っている素晴しい存在であることを、いろいろな活動を通して楽しみながら体得できる。人に助けてもらうのもありがたく、嬉しいことだが、人に与えることができる喜びも、ひとしおのものである。

みんなが、そう、思っている。だから、安心して「他の人とは違う私」を自己表現できるだろう。みんなが手をつないで、地球のように大きくふくらんでいくような気分になる。そんな雰囲気が、「世界の女たち」の集まりには、いつもある。それでこそ、「世界の女たち」という名前の意味も輝いてくる、というものであろう。

もう一言付け加えると、これは、まさしくアメリカの多文化教育の理想でもあるのだ。

地域の文化生活を豊かにする文化活動

「世界の女たち」を地域の視点から考えてみよう。このプログラムは外国人の地域への適応を助けるかたわら、外国人と地域住民との不必要な社会的な摩擦を軽減するのに役立っている。そればかりか、多くのボランティアが語るように、アメリカ人自身がこれらの外国人たちから異文化を学び楽しむ

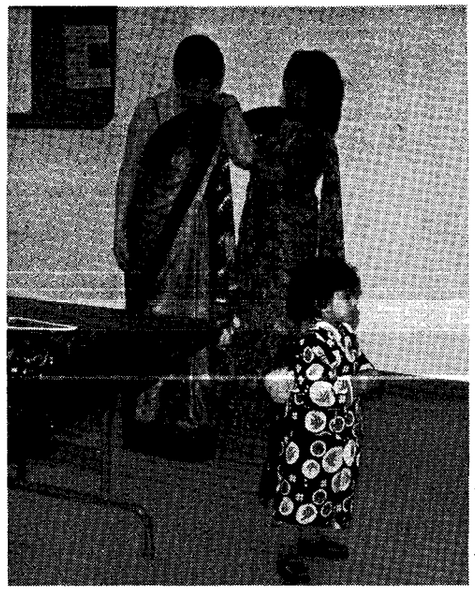
ことで、じぶんたちの地域の文化生活を平和で豊かなものにしている。

この意味で「世界の女たち」の活動は、地域住民のための多文化社会教育といってよいものであろう。

ボランティアの一人、モリソンさんは小学校の校長先生だった。退職後、ボランティアの運転手としてこのグループに参加して四年になるが、とにかく楽しいから続けている。

「この活動からは得ることばかりです。このプログラムに参加する外国の女性たちはみんな私たちボランティアに対していつも感謝してくれるので、とても幸せです。私が車で迎えに行っているのは、中国から来た研究者のお母さん、台湾から来ている女性、日本人もいます。それからロシアから来た女医さん。彼女はまだ英語がよくできないのと、アメリカの医師免許がないから働けないのです。この人たちが車の中でお互いに英語で一生懸命話そうとして、楽しそうに笑いこけているのを聞いているだけでせ幸せな気分になります。

それに、今まで知らなかったことがたくさん学べます。中国と台湾は国交がありませんが、ここではそんなことは関係なくみんな友達になります。当人たちも私たちも国家や国際関係を身近に考え始めて、それが知識だけではなくて人間の交流を通して自分の大切な財産となっていくのを感じます。」



サリーの着付けを楽しむ

今年八〇歳になるハートマンさんは、まだ元気いっぱいで、運転のボランティアをしている。七〇歳くらいにしかみえない。彼女の居間には、帰国した女性たちから送られてきたカードや写真がいっぱい飾られている。

「私の夢はね、『世界の女たち』の支部が世界中にできて、世界平和が実現されることなんです」と、目を細めて語ってくれた。

（よこた・けいこ＝マサーチュセッツ大学アマースト校）